家島彦一著

海域から見た歴史

――インド洋と地中海を結ぶ交流史――

羽田　正

I

日本歴史學界では、最近、海や海域に關わる歴史の研究が一種のブームとなっている。それも、日本海や東、南シナ海など、いわゆる東アジア海域史に關する研究が目立つ。大型研究費が重點的にこの分野に割り當てられているせいもあるのだろう。例えば、二一世紀ＣＯＥプログラムの枠内だけでも、二つの共同研究が進行している。「インターフェイスの人文學」（大阪大學）における「世界システムと海域アジア交通」研究グループと、「東アジアと日本：交流と變容」（九州大學）の中の「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラーム」研究グループがそれである。學習院大學の「東アジア海文明の歴史と環境」（日本學術振興會アジア研究教育據點事業）もある。これらに加えて、全三四班からなる巨大プロジェクトの文部科學省科學研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本傳統文化の形成」が、昨年度から開始された。複數の地域を同時に視野の内に入れ、複數の言語で記された史料を扱わねばならない海域史が、共同研究向きのテーマであることは確かだが、これはいささか異常な事態であるようにも見える。かく言う私自身も、村井章介、深澤克己兩氏とともに、三卷からなる論集『シリーズ港町の世界史』（青木書店、二〇〇五―六）を編集出版したところである。

しかし、日本の歴史學研究において海域史の重要性が意識されるようになったのは、實はそれほど古いことではない。二十年ほど前までは、「日本史」「中國史」「イラン史」「ドイツ史」のような一國史の枠組みが當然のものとして受け入れられ、その枠組みに沿った史料解釋や歴史敍述が行われていた。今日でもなおこの枠組みは相當に強固である。荒野泰典、村井章介、濱下武志各氏らの先驅的な研究を別とすれば、人々がこの角度からの研究の弱點や限界に氣づき、本格的に海や海域の歴史にも目を向けるようになったのは、せいぜいここ十數年のことである。關西の「海域アジア史研究會」が產聲を上げたのが一九九三年、西洋史の研究者を中心とする「國際商業史研究會」が組織されたのが一九九六年であることは、「潮目」の變化を示す出來事として象徴的である。

あらためてこのような研究史を想起すると、本書の著者家島彦一氏が、いかに先驅的な海域史研究者であるかがよく分かる。氏は、すでに一九七〇年に「海域世界」という着想を得、七四年にはそれをはっきりと意識して研究を進めるようになっていたからである（本書七七―八頁）。仲間がまだほとんどいない時代に、獨力でこの研究分野に分け入って道を切り開いてきた筋金入りの海域史研究者である。本書は、この先驅者によるこれまでの研究

成果の集大成であり、インド洋と地中海という二つの海域世界の歴史を論じた本文だけで七八一頁、注や文獻目錄、索引などを加えると千頁近い巨册である。

家島氏には、すでに『イスラム世界の成立と國際商業：國際商業ネットワークの變動を中心に』（岩波書店、一九九一年）、『海が創る文明：インド洋海域世界の歴史』（朝日新聞社、一九九三年）といういずれも大部な二册の學術書があり、海域世界に關する著作としては、これが三册目である。これら以外にも、二册目の專著以後に、一四世紀の大旅行家であるイブン・バットゥータの旅行記の譯注全八卷が、平凡社の東洋文庫シリーズ（『大旅行記』、一九九六―二〇〇二年）として出版され、この仕事の成果は本書でも隨所に取り入れられている。

Ⅱ

最初に、本書の目次を示し、本書がどのような全體構成を持っているのかということを示す。

序章　インド洋と地中海を結ぶ大海域世界

第Ⅰ部　海域世界の成り立ち

概觀

第1章　船の文化――ダウ・カルチャーの世界

第2章　港市――海域ネットワークの接點

第3章　島の機能――海域連關の接點

第Ⅱ部　陸上ルートと海上ルートの連關

概觀

第1章　メッカ巡禮の道

第2章　ナイル峽谷と紅海を結ぶ國際交易ルート

第3章　イラン高原とペルシャ灣を結ぶ國際交易ルート

第4章　スリランカ王の外交使節團がたどった道

第Ⅲ部　國家・港市・海域世界

概觀

第1章　ムスリム勢力の地中海進出とその影響

第2章　海峽をめぐる攻防

第3章　國家による海域支配の構圖――イエメン・ラスール朝の事例

第4章　紅海の國際交易港アイザーブの廢港年次

第Ⅳ部　國際間に生きる海上商人の活動

概觀

第1章　海域世界を股にかける海上商人たち

第2章　カーリミー商人による海上交易

第3章　イエメン・ラスール朝商人の一類型

第Ⅴ部　海域世界における物品の流通

概觀

第1章　地中海產ベニサンゴの流通ネットワーク

第2章　沈香・白檀の產地とイラン系商人の活動

第3章　チベット產麝香の流通ネットワーク

第4章　インド洋を渡る馬の交易

第Ⅵ部　海域世界における文化・情報の交流

概觀

第1章　チュニジア・ガーベス灣の漁撈文化

第2章　インド洋と地中海を結ぶ海の守護聖者ヒズル
第3章　ランプ文様の装飾レリーフと文化交流
第Ⅶ部　海域交流史に關する新史料の發見
概觀
第1章　『インドの驚異譚』に關する新史料
第2章　イエメン・ラスール朝史に關する新史料
第3章　マルディヴ諸島のアラビア語年代記

本書は序章と七部、合わせて全二五章からなる。序章で以下の各章ごとの内容が要約され、さらに各部の冒頭にその部で取り扱われる論點とその意義が簡潔にまとめられている。浩瀚な著書ゆえの工夫であり、讀者はこれらのまとめを讀むだけで本書の内容の大略を把握することが出來る。讀者を意識した丁寧な本作りである。

本書に收錄された序章を除く二四本の論文のうち、一九本は既發表論文に手を加えたもので、序章と殘りの五本は書き下ろしである。一番古い論文は一九六四年發表の舊名「宋代の毗喏耶國と地中海の珊瑚」（第Ⅴ部第一章）で、恩師前嶋信次教授の學風を彷彿とさせる題目である。ただし、古いと言っても、發表當時そのままの形で收錄されているわけではない。論文が公刊されて以後の關連文獻が網羅的に參照された上で十分な手直しが施され、内容は最新のものとなっている。

この一例からも分かるように、元來、様々な學術誌類に時間をおいて單發的に發表された論文が、本書では全體の構想に從い關連づけられ意味づけられて、適當な位置に配置されている。最初から最後まで理論的枠組みは一貫しており、一冊の書物として十分なまとまりを持っていると言えるだろう。著者自身の説明によると、序章と第Ⅰ部は海域世界とその歴史を理解するための總論であり、第Ⅱ部から第Ⅵ部までが各論、第Ⅶ部は附論にあたるという。

先行する二冊の著書との關係について一言しておこう。最初の著書である『イスラム世界の成立』は、主として七世紀から十世紀頃までの西アジアにおける商業、交通の發達とこれらに支えられたネットワークの展開を論じたもので、強調されるのは「イスラム世界」という空間設定である。一方、二冊目の著書『海が創る文明』は、基本的に「海域世界」論である。主たる關心は、インド洋海域世界という一つの文明が成立し、展開、變容する様を明らかにすることにある。扱われている時代は、七世紀からおよそ一六世紀の初め頃までだが、その前半についての記述が多い。既存の二冊の書の序論が、「イスラム世界史像の探求」（『イスラム世界の成立』）、「インド洋海域世界とは何か」（『海が創る文明』）と題されていることは、それぞれの書の重點の置き所の違いを明示的に表している。

これに對して、本書の序章は、「インド洋と地中海を結ぶ大海域世界」である。『海が創る文明』の空間設定を活用し、それをさらに擴大して、世界史の展開を考え直そうとする姿勢が明確に打ち出されている。扱われている時代はやはり主として一六世紀初頭までだが、前二書に比べると後代（一二―一五世紀）に關する主題が多い。議論の枠組みが重なるので、第二の書と本書の間には、若干の内容の重複がある。ダウ船とその文化について、海

の信仰について、紅海とバーブ・アルマンデブ海峡の支配をめぐるマムルーク朝とラスール朝の對立などがそうだが、いずれのテーマも、本書でさらに議論が深められており、今後は本書が參照されるべきである。

一つ混亂を招きかねない用語の問題について、あらかじめ言及しておこう。「インド洋」に「海域世界」という語を附した「インド洋海域世界」という語が、本書のキーワードの一つとして頻繁に用いられるのに對して、地中海については、「地中海海域世界」ではなく單に「地中海世界」という表現が使用されている。その理由は明記されていないが、「インド洋海域世界」の場合は複數の海がそこに含まれ、「地中海世界」についてはそこでいう海が地理的な地中海と一致するからかと推測される。また、「地中海世界」という語はすでに人口に膾炙していると考えられているのかもしれない。

しかし、著者は「海域世界」という語に、「陸域を超えたところに形成される歴史的世界」という獨自の意味を與えている（九頁）。「インド洋海域世界と地中海世界の二つの海域世界」が「大海域世界」という一つの全體を構成することも強調される（例えば一七頁）。とすれば、紛らわしさを避けるためにも、「地中海海域世界」という語が採用されてもよかったのではないだろうか。ともあれ、その名稱の違いにもかかわらず、「インド洋海域世界」と「地中海世界」は、本書ではともに「海域世界」として取り扱われ、議論されている點に留意しなければならない。以後、本稿では、「地中海海域世界」という語を用いて論を進める。

Ⅲ

本書は、間違いなく日本における海域世界史研究の金字塔である。世界的に見ても、いわゆる大航海時代以前のユーラシア諸海域に關わる様々な問題を、これだけ包括的、かつ詳細に論じた著書は存在しない。視野の廣さ、テーマの妥當性、史料の讀み込み、議論の質のいずれの點をとっても、本書は傑出したレベルに達している。これほどの研究成果が日本語の分かる讀者以外に正確に傳わらないのは、何としても殘念である。著者にはぜひ本書の外國語譯出版を眞劍に檢討して頂きたい。

本書の最大の特徴は、現地調査と文獻資料研究を組み合わせた説得力のある論述である。家島氏は、本書で論じられているユーラシア、アフリカ各地のほとんどすべてに自ら赴き、實際にその場に立って過去との對話を試みている。その際、調査の前後に、可能な限りの文獻資料を讀み、現地調査の結果と愼重につきあわせながら、結論を導いている。いくつか例を擧げてみよう。インド洋と地中海を結ぶ二つの交通路であるナイル川～紅海ルートとイラン高原～ペルシア灣ルートは、時代によってその道筋を變える。著者は道路の整備が行き屆かない現地で危險を冒して遺跡を調査し、文獻資料からだけでは分からない具體的な道筋の變化を把握し、その調査結果を基にもう一度文獻資料を讀み直して、新たな解釋を提出する（第Ⅱ部第二章、第三章）。地中海名產の珊瑚の積出港が、ドイツの學者のいうイフリーキヤではなくビジャーヤであることを文獻資料によって證明し、さらに實際に現地に赴いて珊瑚採集に携わる人々から自説を補強する多くの有益な

情報を引き出している（第Ⅴ部第一章）。イブン・バットゥータの旅行記を片手に海の守護聖人ヒズルの廟を求めてイランや東地中海各地を訪ね歩き、バットゥータの記述に現れる古い廟を「發見」するとともに現在のヒズル信仰の廣がりを確認してもいる（第Ⅵ部第二章）。本書のほとんどすべての章で、文獻研究と現地調査が互いに補い合って、説得力のある結論が導き出されている。

交通手段が發達し、遠隔地の情報も入手しやすくなった現在でこそ、中東や東アフリカ各地を訪れることはそれほど難しくなくなった。しかし、一九七〇年代にこれらの地へ赴くことは、多くの困難を伴ったに違いない。家島氏は、「現場から考えるという「現地學」を心がけてきた」（あとがき）とさらりと書き記しているが、それを實現するための強い意志とたゆまぬ努力には、大いに敬意を拂わねばならない。

本書によって具體的に明らかとなった事實は數多い。エジプトやイランにおける主要商業交通路の盛衰、ラスール朝時代に政權と密接な關係を持って商業活動を行った人物の經歴、ベニサンゴ、沈香・白檀、麝香、馬などの具體的な商品の生産、流通とその歴史的意義、それに著者自身が發見しその重要性を確認したアラビア語史料の紹介などは、そのうちでもとりわけ私が感銘を受けた點である。

また、海域史研究を進めるにあたって、前提として氣象や地理的諸條件に關する知識が重要であること、島嶼や海峽にも着目し多様なアプローチをとるべきこと、ダウ船や漁撈文化など周邊的とも思える諸情報に注意を拂うことなど、その道の權威ならではの指摘がそこここでなされており、參考になる。全部で一〇一の港市の立地條件表は壓巻である（八七～九二頁）

今後の比較研究に向けて重要な材料となる事實の指摘も數多くなされている。一例を擧げれば、イエメン・ラスール朝が紅海入り口の保安・監視のために仕立てたシャワーニー船團と呼ばれる武裝艦隊や、ペルシア灣のキーシュを據點とするカイサル家の強力な艦隊の存在である。一般に、インド洋沿岸各地の政權の多くは、強力な海軍を所有していなかったと考えられている。例えば、一六世紀の初めに成立したイラン高原のサファヴィー朝には自前の艦隊がなかったために、自領の目と鼻の先にあるホルムズ島のポルトガル要塞を攻略できず、結局イギリス東インド會社の船を借りて兵を島に上陸させ、これを征服した。インドのムガル朝も、その名に値する海軍は所有していない。それらと比較したとき、ラスール朝やカイサル家が何故このように強力な海軍を持ったのか、あるいは持とうとしたのか、それは時代的な特徴なのか、政治權力の性格の違いに由來するのかといった點は、他の政權の場合とも比較しながらさらに考察を深める必要があるだろう。

カーリミー商人の家系や個別のカーリミー商人の活動についての論述も、比較のための重要な材料である。著者によれば、カーリミー商人とは、「一一世紀から一五世紀まで四百年以上に亘って（中略）西アジア地域をつなぐ國際交易において最も華々しく活躍したムスリム商人の集團」のことである。確かに、カーリミー商人の活動は紅海ルートでは目立っているが、ペルシア灣ルートではこれとは別の商人たちが活發な商業活動を行っていた。家島氏も觸れているキーシュ島やホルムズの王家とその配下の商

人たちはその代表である。彼らについてはまだ研究が十分とは言えないが、最近、四日市康博氏が、イルハン朝政權の下での中國と西アジア間の國際商業についての研究を發表した。また、佐々木達夫氏が、一四―一六世紀に榮えたアラビア半島ペルシア灣側の港町ジュルファールの發掘報告を公表している。[1] 今後、本書で明らかにされたカーリミー商人の實像を參照軸として、これとの比較を通じてペルシア灣海域の商人の具體像が明らかになることが期待される。

Ⅳ

本書はどの地域、時代であれ、今後海域史研究を志す人が必ず參照せねばならない基本圖書である。本書における過去へのアプローチや過去のとらえ方は、これまでの「陸域史觀」を相對化するもので、新しい歴史解釋や敍述方法の豊かな可能性を感じさせる。學術書としての本書の價値は搖るぎないものである。このことを確認した上で、以下では、本書の問題設定とテーマのうちから三つの點をとりあげて私見を記し、關連する分野でさらなる議論が展開されるための材料を提示してみたい。

第一は、空間の枠組み設定についてである。家島氏は、インド洋と地中海が一體となった大海域世界を本書の分析と敍述の對象として定めている。しかし、氏のいうインド洋海域世界は、地理的な意味でのインド洋とは一致しない。東シナ海、南シナ海、ベンガル灣、紅海とペルシア灣を含むインド洋西海域の沿岸地域と島嶼、つまり西アジアから日本に至るユーラシア大陸南側から東側の海のほとんどすべて、がその範圍である（一七頁）。その理由として著者は、これらの海域ではほぼ六ヶ月交替で吹くモンスーンが見られ、そのために沿岸諸地域には類似の生業形態、共通の生活と文化の様式、時間のサイクルや世界觀が生まれたためとする（二〇頁）。しかし、これはいささか強引な議論ではないだろうか。地理的名稱としてのインド洋沿岸はともかく、はたして東シナ海の沿岸、つまり日本列島や中國大陸の生業形態や文化が、ペルシア灣沿岸や東アフリカのそれらと類似、共通だったといえるだろうか。また、逆に、地中海沿岸だけは、特に區別されねばならないほど他の海域と異なる獨自の特徴を持っているといえるのだろうか。

實は、東シナ海については、家島氏自身にもその見解に搖れが見られる。二册目の著書『海が創る文明』では、「インド洋海域世界」に組み込まれているのは南シナ海までなのである。東シナ海海域は地中海世界と同様、インド洋海域世界に接する別の海域として扱われている（三九頁の圖參照）。ところが、本書の序章では東シナ海海域はインド洋海域世界の一部となり、この「大インド洋」世界が地中海世界に對應するものと位置づけられている。著者の考え方がなぜこのように變化したのかは、明記されていない。しかし、推測することはできる。

序章で著者は、陸地の周圍を大洋が取り圍み、その大洋から二つの海が陸地に深く入り込んでいること、その二つの海に挾まれた土地がイラクやシリアなどであるとする十世紀頃のムスリム地理學者が抱いていた世界觀を説明した後、次のように記す。

「私が本書において敍述の對象とする歴史的な海域、すなわち海域世界の捉え方も、イスラーム地理學者たちの考えるこの世界

觀にならったもので、東側部分に「中國の海」と「インドの海」、すなわちインド洋海域世界と、西側部分に「ルームの海」、すなわち「地中海世界」を配置し、以下に述べるように、この兩海域世界が西アジアを中軸として、國際的交流ネットワークによって相互に結ばれ、一つの全體を構成する「大海域世界」として機能していたと捉えようとするものである。」（一七頁）

これを素直に讀めば、著者は、前近代のムスリム地理學者の世界觀に從って、地中海とインド洋という二つの海域世界を想定していると理解される。もし、そうだとすれば、この枠組み設定には異論を持たざるを得ない。著者は本書の中でしばしばヨーロッパ中心史觀の弊害を說いているが、十世紀頃のムスリム地理學者の世界觀は、明らかに西アジア中心だからである。彼らは世界の中心にイラクを置き、氣候や風土の點でそこが最高の土地であるという前提で世界の地理を說明している。[2] 彼らがイラク東方の海域を「インドの海」と一括して捉えるのは、西アジアから遠い中國や日本方面の海域（すなわち東アジア海域）についての彼らの知識が限定されていたからにすぎない。それをそのまま現代の學問的な地域區分の基準とするのはいかがなものだろうか。また、これに關連して、著者が前近代のムスリム地理學者の世界觀をなぜ「海域中心」（一三頁）とするのかもよく理解できない。

地理學でいうインド洋海域と南・東シナ海海域には共通點も見られるが、相違點も多く見られる。まず、船の種類が異なっている。言うまでもなく、インド洋ではダウ船、シナ海ではジャンク船が用いられた。南・東シナ海域は、「ダウ・カルチャーの世界」ではない。また、著者のいう「インド洋海域世界」の說明のうちには、地理的なインド洋には有效であっても、南・東シナ海海域にはあてはまらない場合もある。例えば、「一七世紀末までは、陸域が港市や海域を、その程度の差はあるにせよ、直接に政治的・經濟的支配下に入れることが少なかったので、港市は陸域の影響を避けつつ、自立的・中立的な場として機能していた」（七八頁）、「前近代において、重要な港市の多くは、大陸に近接した小島に成立した」（二一七頁）という文章は、廣州、泉州、寧波といった中國大陸の重要な港町についてはもちろん、博多や堺など日本列島の港町についての說明としても通用しないのではないか。

「インド洋海域世界」といっても、本書で具體的に檢討されているテーマのほとんどはインド洋西海域に關するもので、東シナ海や南シナ海を直接扱った論文はない。著者は、一三世紀半ばから一五世紀半ばにかけての時期に東シナ海域までがインド洋海域世界に統合されたというが（三一一頁）、なぜそう言えるのかを具體的には說明していない。このように考えてくると、むしろ、南シナ海や東シナ海の海域を切り離して、地理上のインド洋、ないしは「ダウ・カルチャーの世界」だけを對象としてインド洋海域世界という言葉を用い、ユーラシアの海域全體が、地中海、インド洋、南・東シナ海という三つの海域世界から成立していると考える方が、全體としてより說得力のある議論を展開できたのではないだろうか。

實は、南シナ海や東シナ海まで含めた大「インド洋海域世界」を設定するのは、家島氏だけではない。例えば、名著『インド洋の貿易と文明』を著したチョウドリーも同樣の地域設定を行って

いる。[3] しかし、私は、地中海海域世界だけを特別視し、これをアジアの海域全體と對比させるこのような地域設定は、ヨーロッパ中心史觀の裏返しではないかと考えている。アジアの諸海域を簡單に一つにまとめてしまわず、比較の手法を用いながらきめ細かくそれぞれの特徴を探ってゆくことによって、海域世界という概念のより精緻な理論化が可能となり、同時にユーラシアの歴史についての理解を深化させることができるのではないか。

二つめの論點は、時間の枠組みに關してである。著者の設定する大海域世界の上限は、七世紀末から八世紀半ば、下限は一七世紀末である。まず、上限について檢討する。著者は、「インド洋と地中海の兩海域間の交流關係は、古代エジプトの諸王朝、ローマ帝國やビザンツ帝國の時代にも見られたが、紀元後の七世紀末から八世紀半ばにかけてのイスラーム世界の形成期になって、兩海域の各々がまとまりのある獨自の價値を持った海域世界として、はっきりとした姿を現し、かつまた相互依存のかたちで交流し合い、一つの全體として機能する大海域世界を形づくるようになった」（二九頁）とする。

時代區分は、畫期の前と後で何がどう變わったのかを明示してはじめて有效となる。本書ではこの點はあらためて述べられていないが、それは前提として、前作の『海が創る文明』の時代區分論を受け繼いでいるからである。前作では、紀元前三〇〇年から紀元後七〇〇年までの約一千年が「前インド洋海域世界の時代」と呼ばれ、この時期の特徴として、インド洋西海域世界、ベンガル灣海域世界、南シナ海海域世界という三つの海域世界がまだ緊密に結びついていなかったことが擧げられている。そして、八世紀初め以後、ペルシア船やアラブ系・イラン系のムスリム船が廣州や揚州を訪れるようになったことで、西アジアから南中國にいたる海域ネットワークが急激に成立したとされる。

地中海を除いたアジアの海域だけを對象とするなら、この議論は成立するだろう。しかし、本書での中心的な議論は、西アジアを介した地中海とインド洋西海域の緊密な結びつきである。この點で、八世紀以前と以後で本質的な變化はあったのだろうか。七世紀末より前にもインド洋西海域と地中海という二つの海域の交流が存在したことを著者自身が記しているし、西アジアの領域國家は、この時期以前も以後も「兩海域世界への經濟的影響力の擴大を求めた」（註九四頁（三〇））。

これはユーラシア海域をどのように區分して把握するかという空間論と關わるが、もし上で述べたように、南シナ海海域世界を「インド洋海域世界」から切り離し、ユーラシアの西と東に二つの海域世界が存在していたと考えるなら、西の海域、すなわち、地中海海域とインド洋海域が一體化するのは、八世紀よりも早かったのではないか。そして、西の海域と東の海域が緊密に結びつくようになるのが、東南アジア史でいう「交易の時代」[4]が始まる一三世紀頃とは考えられないだろうか。

もし、七世紀末頃に「イスラーム世界」が成立したことがこの時期を畫期とするということの理由なら、私はそれには同意できない。既に別の著書で詳述したのでここでは繰り返さないが、「イスラーム世界」という枠組みは近代以後のイデオロギーにすぎず、「イスラーム世界」という語を用いて世界全體の歴史を敍述・理解しようとすることには無理がある、と考えるからである。[5]

また、はたしてムスリム政權が進出した後の地中海海域世界は、古代ローマ帝國時代と比べて、より「まとまりのある獨自の價値を持った海域世界」と言ってよいのだろうか。この點でも、上に引用した著者の論述には疑問を感じる。

次に下限である。著者が歴史世界としての「インド洋海域世界」の下限を一七世紀末とする理由は、「西アジアを中閒媒體としてダイナミックに機能していた大海域世界の全體が相互依存の形で交流する機能を徐々に失って、インド洋海域世界、地中海世界、さらにはそれぞれの小海域に分節する傾向を強める一方、西ヨーロッパ諸國を新たな軸心として、全世界の海域にまたがる西ヨーロッパの近代世界システム（陸域支配システム）が伸張していく」からである（三〇頁）。

大筋では同意見だが、私はこのような現象が生じるのは、もう少し遲いのではないかと考えている。史料を讀む限り、少なくとも一八世紀前半の段階では、インド洋海域世界の大部分の地域におけるヨーロッパ諸國の商業活動や軍事的壓力はまだきわめて限定されており、海域世界の自律的なリズムが生き續けているように感じられるからである。この點は、今後個別の研究を積み重ねることで實證してゆきたいと考える。

三つ目の論點は、國家ないし政治權力と港市や國際商業の盛衰との關連についてである。この問題が「實に多様で複雜な政治的・經濟的力學のバランス」（二八一頁）の上に成り立っていることは事實だ。しかし、著者が記すように原則は明らかに存在する。

「各々の港市は互いに競爭關係にあり、つねに他の港市より多くの船舶の入港を促し、外來商人の來着を期待していたので、一つの港市が商人の身の安全と滯在を保障せず、強制的に積荷や財産を沒收したり、不當に高率の關稅を課すことがあれば、直ちに船舶の入港や商人の往來が途絶えて、別の港市に交易活動の中心が移るおそれがあった。そうした理由によって、國家と港市の支配者は、國庫の財政收入を增やし、都市の文化的・經濟的繁榮に貢獻するためにも、外國船や商人の繼續的な來航を歡迎し、關稅率を引き下げる努力をおこなった」（三九八―九頁）。

このような原則があるにもかかわらず、なぜ國家や政治權力はときに國際商業に壓力をかけるのだろうか。また、それはどのような場合に起こるのだろう。「ブワイフ朝の強力な統制下におかれたフィールーザーバード～スィーラーフ道の活動は徐々に衰え」（二二八頁）、「アデン港では不當に高率の入港關稅の徵收や商人の積荷・財産の強制沒收によって（中略）たびたび對立と騷動が發生した」（二七〇頁）といった文章が注釋なしに記されているのを讀むと、ややもどかしい思いがする。その閒の事情をさらに詳しく分析し、王朝國家と商業統制の相關關係をより理論的に提示して頂きたかったからである。

前近代における國家と商業・商人の關係についても、さらに議論を深める必要があるように感じる。現代の國民國家における政府とは異なり、前近代の王朝國家では、王家や政府高官が國際商業に參加することがしばしばあった。當然、そこには王家や政府と密接な關係を持つ商人の存在が認められる。例えば、カーリミー商人がその一例だし、著者がイエメンの「國家の商人」として紹介するアミーン・ウッディーン・ムフリフ・アットゥルキー

もそうである（四七八頁）。しかし、國際商業に携わったのはそのような商人だけではない。商人の大部分は王家や政府と直接の關係を持たずに商業活動に從事した。當然、兩者の間にはしばしば利害の對立が起こったはずである。時代と地域は異なるが、一七世紀のイギリスの王權がしばしばイギリス東インド會社の利害に反する政策を採用したことはよく知られている。本書では、「イエメン商人」「スィーラーフ商人」「グジャラート商人」のように地名が附されて表記される商人が數多く登場するが、彼らがその居住地の王權とどの程度の關係を持っており、どのような規制を受けていたのか、逆に政府の政策にどのような影響を與えていたのかという點について、本書では詳しく論じられていない。「海域世界」の實態をさらに深く把握するために、このテーマは今後より深く檢討されるべきだと考える。

最後に望蜀の言を少々。本書の第Ⅲ部か第Ⅳ部に、インド洋海域世界における具體的な商取引の様子がまとめて記されていてもよかったのではないだろうか。例えば税について言えば、各港市における關税は何に對してどの程度かけられたのか、港市ごとに税率の違いがあったのか、品物によって、あるいはその所有者の宗教やエスニシティによって税率が異なったのか、異なったとすればどの程度の差なのか、關税は誰がどのような形で徴收したのか、船舶の入港税はどの程度かかったのか、などである。出自の異なる商人同士の商取引に介在したはずの通譯やブローカーの姿や具體的な役割についても言及があってよかった。また、海域世界に生きたのは商人だけではない。船員や水夫、船大工や港灣勞働者などについての論考があれば、本書の内容はより充實したものとなっただろう。

著者がイスラーム教との關わりを重視して大海域世界という枠組みを設定しているのなら、『イスラームと海：モスクと水夫。七―二〇世紀』と題するド・プラノルの書が、ぜひ批判的に參照されるべきだったろう。(6)

以上、なにぶん大部な書なので、讀み落としや讀み誤りがあるのではないかと恐れる。著者のご海容をお願いしたい。いずれにせよ、本書の出現によって、ユーラシア海域史の研究が今後さらに進展することは疑いない。學問的に貴重な價値を有する書の出版を心から喜びたい。

註

（1）四日市康博「元朝とイル＝ハン朝の外交・通商關係における國際貿易商人」森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』「九州大學二一世紀ＣＯＥプログラム（人文科學）東アジアと日本：交流と變容」發行、二〇〇六年。佐々木達夫「ペルシア灣と砂漠を結ぶ港町」村井章介責任編集『港町と海域世界』（シリーズ港町の世界史一）、二〇〇五年。

（2）この點については、羽田正「ムスリムの地理的知見と世界像」林佳世子・桝屋友子編『記録と表象　史料が語るイスラーム世界』（イスラーム地域研究叢書八）東京大學出版會、二〇〇五年、八七、九〇、九六、一〇五頁參照。

（3）Chaudhri, K.N., *Trade and Civilisation in the Indian*

Ocean : An Economic History from the Rise of Islam to 1750, New York, 1985.

（4） アラブ系・イラン系の商人が南中國を訪れたことは、確かに海域世界史の重要な事件だが、畫期とまで言ってよいのだろうか。このことは、中間に位置する據點が未成熟であり、東と西の海域を結ぶ有效なネットワークがまだ形成されていなかったことを證明しているとも解釋できる。彼らは後には中國まではほとんど出かけず、東南アジアで南・東シナ海を活動の據點とする商人がもたらす物資を入手するようになる。その時代（すなわち、およそ一三世紀頃）になってはじめて、ユーラシアの海域が一體化したと考える方がよいのではないか。

（5） 羽田正『イスラーム世界の創造』東京大學出版會、二〇〇五年、また、イデオロギーとしての「イスラーム世界」を世界史敍述に使用することの問題點に關しては、羽田正「「有用な歴史學」と世界史」『UP』四〇〇、二〇〇六年を參照。

（6） Xavier de Planhol, *L'Islam et la mer, la mosquée et le matelot. VIIe-XXe siècle*. Perrin (Paris), 2000.

二〇〇六年二月　名古屋　名古屋大學出版會

A五判　X＋七八一＋一八七頁　九五〇〇圓